

# 大学連携におけるボランティア活動推進をめぐる課題

—長久手市 4 大学学生ボランティア調査から—

愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科

松宮朝・石井晴雄<sup>1</sup>・川原千香子<sup>2</sup>・小島祥美<sup>3</sup>・中根多恵<sup>4</sup>・笹山実希<sup>5</sup>

## 1. 本稿の目的

本稿は、長久手市大学連携基本計画策定ワーキンググループのメンバーによる、今後の大学でのボランティア活動推進をめぐるニーズと課題を探るための、愛知淑徳大学、愛知医科大学、愛知県立芸術大学、愛知県立大学の学生を対象とした質問紙調査の分析である<sup>6</sup>。長久手市では、2008年度策定の『第5次長久手市総合計画』における3つの主要プロジェクトの1つとして、「リコモテラス構想」が位置づけられている。具体的には、「リコモテラス公益施設(仮称)整備基本計画」(長久手市暮らし文化部たつせがある課編, 2016)において掲げられた4つのテーマの1つとして大学連携を謳っており、長久手市内にある愛知淑徳大学、愛知医科大学、愛知県立芸術大学、愛知県立大学の4大学との協働で地域連携基本計画策定作業を行っている。このビジョン策定のワーキンググループ(代表:石井晴雄、メンバー:川原千香子、小島祥美、松宮朝)では、大学生のボランティア活動の推進による地域課題の解決を、ビジョンの中心に据えることとした。

こうした取り組みの背景には、大学側では、教育、研究とともに、第三の使命として地域貢献が重視される流れがあり(松宮, 2011; 木村, 2014)、大学としてボランティアを教育カリキュラムに組み入れる動きが活発化していることが挙げられる。大学の地域連携とボランティアとのより一層の結びつきが求められる状況のなかで、大学生にとっては、地域でのボランティア活動が重要な学びの機会となることが期待されている。

しかし、大学生を含む若い世代の継続的なボランティア活動やボランティアに対する意識が定着したとは言えず(荒井・野嶋, 2017:98)、また学生のニーズや、地域のニーズを無視した制度化は、「強制されるボランティア」につながる問題(津止・斎藤・桜井, 2009:62)がつかまとう。したがって、いかに、大学生のニーズと地域の課題をつなげ、大学生にとっての教育的意義を持つ取り組みが可能かを検討することが重要な課題となる。本稿では、4大学の学生を対象としたボランティア経験と、ボランティア教育へのニーズを把握することを通して、今後の活動推進のための課題を抽出することを目的としている。

<sup>1</sup> 愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻准教授。

<sup>2</sup> 愛知医科大学医学部シュミレーションセンター講師。

<sup>3</sup> 愛知淑徳大学交流文化学部准教授。

<sup>4</sup> 愛知県立芸術大学准教授。

<sup>5</sup> 長久手市暮らし文化部たつせがある課主事。

<sup>6</sup> 本稿は、長久手市大学連携基本計画策定ワーキンググループ受託研究の一部であり、2018年3月策定予定の長久手市大学連携基本計画策定のための基礎資料である。

## 2. 調査の概要

上記の目的に対応した基礎資料作成のため、2017年10月に、4大学の学生を対象としたボランティアに関する質問紙調査<sup>7</sup>を実施した。サンプルについては、各大学の学生名簿からのサンプリングが困難であったため、ワーキンググループメンバーが担当する各大学の授業で配布・回収した。有効回収票は、愛知淑徳大学 113 票、愛知医科大学 83 票、愛知県立芸術大学 72 票、愛知県立大学 424 票となっている。

このように、調査データは厳密なサンプリングを経たものではない。そのため、あくまでも、各大学における大学生のボランティア経験等の概要を把握することを目的としたデータ集計・分析である点を断っておきたい。また、データに関しては、その公表を最優先に、単純集計を基本としている。

まずは、回答者の基本属性について確認しておこう。

表 1 回答者の性別(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
男性	33.6	57.8	18.1	27.4
女性	64.6	41.0	80.6	69.8
その他	0.9	0	1.4	0.5
無回答	0.9	1.2	0	2.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

回答者については、愛知医科大学のみ男性が 57.1%と、女性よりも多くなっている。

表 2 回答者の学年(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
1年生	42.5	0	31.9	44.3
2年生	19.5	1.2	48.6	33.0
3年生	26.5	97.6	6.9	17.9
4年生以上	10.6	0	12.5	2.4
無回答	0.9	1.2	0	2.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

学年について、愛知医科大学が3年生 97.6%となっている以外は、1年生と2年生が中心で、4年生以上は少ない。

<sup>7</sup> 調査票作成にあたっては、佐々木編著(2003)、片桐(2009)を参考にした。また、調査データの入力においては、愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科学部生、永井杏、近藤香澄、加藤奈々、市原千夏、田邊志生莉、村木亮介、青木春菜、林晃司、北川聖奈の各氏にご協力いただいた。

表 3 回答者の居住地(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
長久手市内	8.0	37.3	43.1	10.4
名古屋市内	38.1	34.9	27.8	23.1
長久手市、名古屋市以外の愛知県内	39.8	25.3	18.1	52.6
岐阜県	6.2	1.2	9.7	8.5
三重県	5.3	0	1.4	1.7
静岡県	0	0	0	0.2
その他	1.8	0	0	1.2
無回答	0.9	1.2	0	2.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

回答者の居住地は大学ごとに大きな違いが認められる。長久手市内に居住する学生が多いのが、愛知医科大学、愛知県立芸術大学であり、愛知淑徳大学、愛知県立大学では 1 割前後である。

表 4 回答者の居住形態(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
実家	82.3	32.5	44.4	79.0
下宿	16.8	63.9	54.2	17.5
その他	0	2.4	1.4	1.2
無回答	0.9	1.2	0	2.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

居住形態についても、大学ごとに大きな差が認められる。愛知淑徳大学、愛知県立大学では自宅が約 8 割であるのに対して、愛知医科大学、愛知県立芸術大学では、下宿生が半数以上を占めている。

### 3. ボランティア経験と、ボランティア活動の内容

では、学生のボランティア経験はどのような状況だろうか。

表 5 ボランティア活動経験(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
あり	71.7	34.9	58.3	59.7
なし	28.3	65.1	41.7	38.2
無回答	0	0	0	2.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

ボランティア経験については、愛知淑徳大学で「あり」という回答が 71.7%と最も多くなっている。これに続くのが愛知県立芸術大学、愛知県立大学で、どちらも 6 割弱である。

表 6 ボランティア活動の開始時期(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
小学生以前	18.5	27.6	47.6	32.4
中学生	28.4	24.1	31.0	36.8
高校生	16.0	13.8	7.1	9.5
大学入学後	37.0	34.5	14.3	20.9
無回答	0	0	0	0.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

ボランティア活動の開始時期は、愛知淑徳大学、愛知医科大学では「大学入学以後」が約1/3を占め、逆に愛知県立芸術大学、愛知県立大学では、「小学生以前」、「中学生」が多くなっている。

表 7 ボランティア活動での充実感(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
感じた	97.5	89.7	76.2	88.9
感じなかった	2.5	10.3	23.8	11.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

ボランティア活動での充実感については、愛知淑徳大学の学生で97.5%と圧倒的に高くなっている。

表 8 現在のボランティア活動(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
行っている	53.1	20.7	9.5	17.4
行っていない	44.4	79.3	90.5	82.6
無回答	2.5	0	0	0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

現在のボランティア活動についても、愛知淑徳大学で「行っている」という回答が53.1%と最も多い。愛知医科大学20.7%、愛知県立大学17.4%、愛知県立芸術大学9.5%と続いている。

表 9 現在のボランティア活動に対する満足感(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
満足している	72.1	83.3	50.0	72.7
満足していない	7.0	16.7	25.0	11.4
どちらでもない	14.0	0	0	11.4
わからない	7.0	0	0	4.5
無回答	0	0	25.0	0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

ボランティアに関しては、概ね「満足している」という回答が多くなっている。なお、愛知県立

芸術大学の値が相対的に低くなっているが、サンプル数が4と非常に少ない点を考慮する必要がある。

表 10 現在のボランティア活動と大学での専攻(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
ある	37.2	16.7	0	54.5
少しある	25.6	50.0	0	20.5
あまりない	18.6	16.7	25.0	11.4
全くない	18.6	16.7	50.0	9.1
無回答	0	0	25.0	4.5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

表 1 に示したように、各大学のボランティア活動の内容について見てみると、大学ごとの違いは大きい。しかし、その具体的な内容からは、各大学の専攻の特色を生かしたものとなっていることがわかる。以下では、その特質を確認するために、自由回答で挙げられたボランティア活動の主な内容を、「環境関係」、「防災関係」、「福祉・医療関係」、「子ども関係」、「地域・イベント」の5項目に分けて、大学別に示しておきたい。

#### <主なボランティア活動の内容>

##### ①愛知淑徳大学<sup>8</sup>

###### ○環境関係

- ・ゴミ拾い・海岸清掃活動・長久手市のごみ減量呼びかけ・佐久島の清掃

###### ○防災関係

- ・東日本大震災で愛知県に避難されている被災者家族を対象とした支援活動
- ・子ども達が楽しみながら防災の知識を学ぶことのできる啓発活動
- ・大学の震災支援団体で、東日本大震災で被災し、愛知県に移住してきているご家族を東山動物園に招待するイベントを企画
- ・九州地方の豪雨水害募金

###### ○福祉・医療関係

- ・ホスピスにて、合唱をするボランティア
- ・老人ホームの手伝い(配膳、歌、移動の手伝い等)
- ・障害者支援施設の手伝い
- ・高齢者施設で買い物の手伝い
- ・介助犬フェスタ
- ・地域の高齢者のサロンを訪問し、料理を通して交流するボランティア
- ・障害者スポーツ運営の手伝い

<sup>8</sup>愛知淑徳大学では、愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター編(2017)により、毎年度、学生のボランティア活動に関する詳細な記録が蓄積されている。詳細については愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンターHP、<https://www.aasa.ac.jp/institution/ccc/>、2017年11月30日最終確認。なお、ワーキンググループのメンバーである小島祥美氏は、外国人の子どもへのボランティアに関する論考がある(小島, 2014)。

- ・あしなが育英会募金活動
- ・1人暮らし高齢者との料理を通じた交流・活動を広げるために社協などを訪問し情報収集している
- 子ども関係
  - ・外国人児童との交流、高齢者と子どもを繋げる活動
  - ・外国人児童への学習支援、文化活動
  - ・小学校学習サポート
  - ・保育園の手伝い
  - ・名古屋市立名東児童館での中学生向け学習サポート
  - ・子ども向け防犯教室のボランティア(愛知県警や市役所と連携し、楽しい体験型の防犯教室を開催しています。)
  - ・子ども達が楽しみながら防災の知識を学ぶことのできる啓発活動
- 地域・イベント
  - ・名古屋城で来場者のガイドをする
  - ・佐久島活性化プロジェクト
  - ・過疎地域の地域活性化活動(農作業の手伝い・地域特産物や建築物について学ぶ・地元住民との食事やお泊り会を通してコミュニケーションを取る)

## ②愛知医科大学

- 環境関係
  - ・地域のゴミ拾い、草刈、地方の海の用水路の清掃・農業ボランティア
- 防災関係
  - ・災害についての出し物や講義・震災関係(桜の植樹・瓦礫撤去、物資を送る)
- 福祉・医療関係
  - ・炊き出し
  - ・健康ダンス作り、名古屋フィットネスフェスタのお手伝い
  - ・障害者施設のお祭り、障害児の学校へ訪問、デイサービス
  - ・老人ホームや孤児院への演奏訪問
  - ・赤い羽根募金
  - ・ピンクリボン、フェアトレードイベント、ヘモフィリア友の会イベント
  - ・病院小児科ボランティア(子どもの相手)、病院内での合唱
  - ・イベントの救護所のスタッフ
  - ・一時救命処置の指導
- 子ども関係
  - ・保育園へ行き、幼児と遊ぶ
  - ・子どもキャンプのリーダー
  - ・カンボジアで子どもたちと遊んだり、日本語を教えたりした。また、日本から持ってきた服や物をあげた

○地域、イベント

- ・大曽根夏祭りのボランティア。歌イベントがあったので、その音響機器の操作を行ったり、露天の手伝いをした

③愛知県立芸術大学

○環境関係

- ・地域、通学路の清掃活動・川のごみ拾い、川の掃除・海岸、砂浜のごみ拾い
- ・植林、植樹・農家のお手伝い

○福祉・医療関係

- ・知的障害を持った方々とキャンプに行った
- ・知的障害のある人と遊園地や電車に乗ったりした
- ・老人ホーム訪問(吹奏楽部での演奏活動)
- ・赤い羽根や青い羽根の募金呼びかけ
- ・共同作業所が主催しているお祭りのお手伝い

○子ども関係

- ・小学校の児童館での低学年の子のお世話
- ・学習支援教室
- ・幼稚園で先生方の手伝い
- ・子どもむけのアート体験教室のお手伝い
- ・県美小学生向けワークショップ引率

○地域、イベント

- ・地域で開かれた芸術祭の市民ボランティアとして、企画の考案や展示の監視等
- ・トライアスロンのボランティア・青島太平洋マラソンの応援
- ・美術交流祭のカギ開閉
- ・イベントスタッフ(地域アートイベント)

④愛知県立大学<sup>9</sup>

○環境関係

- ・ゴミ拾い、地域清掃・植樹活動
- ・栃木県での森林整備
- ・ブルーアースプロジェクト

○防災関係

- ・スペイン・バルセロナでの東北、熊本復興支援ボランティアでのバザン活動
- ・東日本大震災の復興・東北支援活動

---

<sup>9</sup> 愛知県立大学では、愛知県立大学地域連携センター・松宮・山本編(2010)、松宮(2011)、愛知県立大学東日本大震災復興支援委員会編(2013)、松宮・加藤(2014)、加藤(2017)において、ボランティア活動の一部が記録されている。

○福祉・医療関係

- ・障害を持つ子どもと接する
- ・高齢者の生活の手伝い、施設の祭りの手伝い
- ・独居老人住宅の雪かき
- ・障害のある高校生の外出を手伝う
- ・デイサービスでの手伝い・知的障害者のデイサービス施設、就労支援施設
- ・老人ホームの夏祭りのボランティア
- ・日系ブラジル人の学習支援
- ・ベルマーク回収と車いすの寄付、老人ホームの利用者との交流、農作物を作り売上を寄付
- ・保育士の手伝い、高齢者と会話、子どもと遊ぶ
- ・技能実習生への日本語指導

○子ども関係

- ・国際学校で子どもに教えること
- ・子ども映画祭のスタッフ、キャンプ、子どもと自然環境で関わる
- ・子ども食堂、宿題教室
- ・子ども会のイベントの手伝い
- ・英語を母語としない外国の子どもに対する英語教育
- ・保育園の夏祭りのボランティア・児童館でのボランティア
- ・子ども関係のイベントの手伝い
- ・幼稚園の手伝い・サークル・児童との交流・小学校の土曜学習の手伝い
- ・児童センターの七夕祭りの手伝い
- ・中学校で学習チューター・授業についていけない生徒をサポートする
- ・スクールボランティア・小学校の学級担任の補助

○地域・イベント

- ・果樹園での収穫や作業の手伝い
- ・地域交流、地域おこし
- ・夏祭り・運動会ボランティア・農家の手伝い
- ・アメリカでの食事関係のボランティア
- ・中学で行われていたホリデーボランティア
- ・海外で植樹、交流、国内でサンタになる
- ・リニモ沿線の地域と学生を結ぶ
- ・どまつりスタッフ
- ・名古屋ウイメンズマラソンのボランティア
- ・カンボジアでのマングローブ植樹、日本語教育、異文化交流



#### 4. ボランティア活動の経験

次に、こうしたボランティア活動の経験が、学生に対してどのような影響を与えた／与えているのかという点について見ていこう。

表 11 ボランティア活動が自身の進路に与える影響(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
大いにある	37.0	20.7	7.1	15.0
少しある	38.3	41.4	42.9	46.2
あまりない	8.6	20.7	31	21.3
全くない	0	10.3	4.8	7.9
わからない	14.8	6.9	14.3	8.7
無回答	1.2	0	0	0.8
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

ボランティア活動が自身の進路に与える影響については、「大いにある」と「少しある」を合計した値から見ると、すべての大学において半数以上が「あり」と回答している。その中でも、愛知淑徳大学が 3/4 以上が「あり」と回答しており、最も高い。

表 12 ボランティア活動での経験(複数回答)(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
地域のために役に立った	46.9	55.2	54.8	59.7
困っている人のために役に立った	45.7	51.7	21.4	28.1
人間性が豊かになった	39.5	41.4	14.3	23.7
思いやりの心が深まった	53.1	58.6	31.0	39.5
生活に充実感ができた	28.4	27.6	16.7	17.0
友人や知人を得ることができた	39.5	27.6	11.9	20.6
知識や技能が身についた	39.5	27.6	16.7	21.7
ものの見方、考え方が広がった	65.4	51.7	28.6	39.1
学校で評価された	9.9	10.3	14.3	16.6
報酬(お礼)があった	16.0	13.8	7.1	13.4
福祉など社会の問題に対する理解が深まった	37.0	34.5	21.4	19.8
その他	1.2	3.4	2.4	0.8

ボランティア活動の経験については、4 大学とも、「地域のために役に立った」という回答が多くなっている。他に、「困っている人のために役に立った」、「思いやりの心が深まった」、「ものの見方、考え方が広がった」という回答は、愛知淑徳大学、愛知医科大学において多くなっている。一方、すべての大学で「学校で評価された」、「報酬(お礼)があった」という回答は相対的に低くなっている点も重要と思われる。

なお、この点に関する先行研究として、2013～2014 年に立正大学、高知大学の学生を対象に実施された調査では、「コミュニケーション力」、「価値観の変化、視野の広がり」、「積極性・主体性が身についた」などが挙げられている(新藤ほか, 2017:98)。4 大学の調査データ

からも、概ね、同様の傾向を見て取ることができるだろう。

以下では、自由回答で挙げられた主な経験の内容を、「学び」、「コミュニケーション力」、「意欲」の3点に多く分類した上で、大学別に示しておきたい。

#### <ボランティア活動を通じた経験>

##### ①愛知淑徳大学

###### ○学び

- ・商店街・島に観光客を呼び込む難しさが分かった。地元の方とのかかわり方で、活性化するか決まることが分かった
- ・障害を持っているというだけで、世間からは普通の子供ではないという見られ方をされてしまっている現状がある中、参加してみて、自分自身で思っていたこととずいぶん違い、視野がとてつとて広がりとてもいい経験になった
- ・東日本大震災は遠くの地域だけの問題ではなく、愛知県にいてもやれることはたくさんあり、教訓を活かすべく防災・減災の活動は非常に重要になると思う
- ・企画することの大変さを学ぶことができた
- ・高齢者の方々に活動を呼びかけるのがプロの方々であっても大変だったと聞き、考えて行動していかななくてはならないと感じた
- ・父親が育児に参加することの大切さ、子どもとのコミュニケーションの大切さを知ると共に、自分事として子育てを認識できた
- ・生徒一人一人の学力やその日の状況(学校の宿題の量・体調など)にあわせたカリキュラムを考えられるようになった
- ・ただ時間つぶしの自己満足でやったことなので結果的に人の役に立てていれはうれしいが、実感はない

###### ○コミュニケーション力

- ・人とのふれあいの大切さ、楽しさを学ぶことができた
- ・様々な立場の方々が集まり、関わり話し合うことによって、今まで知らなかったそれぞれの団体の抱える災害への思いなどを知ることができた。交流する、知ることの大切さを感じた
- ・子どもに上手く接することができるようになった。今後の役に立ちそう
- ・人との交流が特に盛んになった。地域を知るためには関係のある人と言葉を交わしたり、自分から行動しないとずっと分からないということがわかった
- ・長久手市に住む一人暮らしの高齢者の方々と、料理を通して交流することで、地域への結びつきや高齢者とのコミュニケーションの促進を実感できている
- ・初対面の人と共同作業を通じて仲良くなることができた

###### ○意欲

- ・ボランティアに行った過疎地域は、交通の便が悪かった。しかし、その地域は、残し伝えるべき祭り・建築物・農作物・景観がある魅力のある地域だった。より多くの人に地域を知ってもらい、過疎化を止め多くの人に来てくれる企画を手伝いたいと感じた
- ・誰かのために何かをしたい
- ・一人でも多くの人に広まってほしい
- ・ボランティアとは何かという想いが一層深まった

## ②愛知医科大学

### ○学び

- ・社会勉強になった・新たに世界が広がった
- ・医療に関することは将来の仕事の練習、医療に関しないことは自分の世界を広げていると思っている
- ・高齢者に対する見方や考え方が変わった

### ○コミュニケーション力

- ・異文化交流かつ途上国の子どもたちを触れ合うことで国が違って心も交流ができることに感動した
- ・地域の商店街の活性化の一端を担うことができ、達成感が得られた。また、初対面の方とのコミュニケーションをとるのが楽しかった
- ・現地の人の温かさ、現地の人を支援し続けている人たちの温かさを感じた

### ○意欲

- ・自分にとって楽しくいい経験になることが他人の役にも立つという一石二鳥なところがとても好き
- ・送った物資は、意味があったのだろうか。救護所の医師を見て、自分はまだまだだと思った

## ③愛知県立芸術大学

### ○学び

- ・家庭にさまざまな問題を抱えて、困っている家族は多いのだということを知った、そのことに対して力になりたいと思っている地域の人々もいるのだということも知った
- ・山を切り崩して町を作っているけど大きな木ほど長い年月をかけて大きくなっていて、それらは勝手に生えて大きくなる訳じゃない
- ・農家はとても大変だと思った
- ・捨ててはいけない所にこんなにもごみがあると思っていなかった
- ・募金は誰もがした方がいいとは思うけど実際はあまりやってくれる人はいない
- ・意外と募金をしてくれる人はいるんだなーと思いました

### ○コミュニケーション力

- ・様々な経験を持った、違った世代の人たちと交流し、意見を交えられたことは、学生の私には視野の拡張の良い機会となった
- ・荷物を運ぶ以外にも様々な交流を図ることができ、知らない人とかかわる大切さを知れた
- ・それまで子どもに接するのが苦手だったが、子どもと少しずつコミュニケーションがとれるようになった

### ○意欲

- ・ささいなことでも人の役に立てたり喜んでもらえたりして、人のために何かすること＝気持ちがいい、自分の心も元気にしてくれること、という考え方を持てた
- ・この小さな木が環境を保護する手助けになっていると思うと、どんどんボランティアをやっていきたいと思った
- ・他人事のように思っていた出来事が、自分に身近にあるように感じられた
- ・子供はかわいいなと思った、将来幼稚園の先生になりたいとその時思った
- ・作業量に対して人が多すぎて、私たちがやりますといってもやらせてもらえず、休日の早朝に呼び出された意味が分からなかった

#### ④愛知県立大学

##### ○学び

- ・行為自体が自分にとって大きな経験になると分かった
- ・コミュニケーションの難しさ仕事の大変さを知った
- ・日本語能力の低い児童生徒に何ができるか考えさせられた
- ・働くことの大変さが分かった
- ・教育に関するお金が不足していると感じた
- ・世の中には学校に通いたくても通えない人がたくさんいることを知った
- ・交通安全に対する意識と活動の幅広さを理解できた
- ・責任感を持って子どもと触れ合うことを知れた
- ・多くの人が協力して祭りを開催していることが分かった
- ・自分たちが「してあげた」というよりも「してもらった」という思いの方が強かった。自己満足で終わるようなボランティアならしない方がましかもしれないと感じた
- ・誰かのために何かすると自分に良いことが返ってくる。自分のしたことは小さなことだが、行ったことのスケールは関係なく、行為自体が自分にとって大きな経験になると分かった

##### ○コミュニケーション力

- ・子どもと接することが難しかった・やってみると上手いいかないことが多かった
- ・小さい子どもへの接し方を学ぶことができた
- ・子どもの頃楽しませてもらったことの恩返しになったかなと思う
- ・普段関わることのできない人の考えを知ることができて楽しい
- ・認知症の方と会話する難しさを感じた
- ・地域の人と話すことでお互い身近に感じることもできた

##### ○意欲

- ・人とのつながり地元とのつながりを大切にしていきたい
- ・同世代が祭りで遊んでいる中、つらかった
- ・障害や子どもについて学ぶために続けたい
- ・将来教師になりたいので、現場を感じることもできた

#### 5. 今後のボランティア活動への期待と大学のかかわり

表 13 今後の社会におけるボランティアの果たす役割について(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
大きくなると思う	61.9	54.2	36.1	57.3
大きくなると思わない	6.2	8.4	22.2	9.7
わからない	12.4	31.3	30.6	24.3
無回答	19.5	6.0	11.1	8.7
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

今後の社会におけるボランティアの果たす役割について「大きくなると思う」という回答は、愛知淑徳大学で 61.9%と最も高く、愛知県立大学、愛知医科大学で 5 割を超えている。こうした傾向からは、ボランティア活動への肯定的な評価を見てとることができるだろう。

表 14 大学教育におけるボランティア活動の扱い(複数回答)(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
ボランティアについて授業で教える	24.8	15.7	12.5	18.2
技術や知識などの研修会開催	38.1	27.7	30.6	26.9
ボランティア活動相談	42.5	22.9	12.5	20.5
ボランティア活動情報の提供	54.0	44.6	55.6	60.6
学校の単位として認定	20.4	20.5	37.5	24.3
活動を行う学生の積極的評価	16.8	15.7	20.8	14.6
その他	0.0	1.2	1.4	0.2
特になし	0.9	10.8	2.8	4.2

ボランティア活動に対する大学のかかわりについては、各大学とも、「ボランティア活動情報の提供」が最も多くなっている。「技術や知識などの研修会開催」、「ボランティア活動相談」、「学校の単位として認定」が続いている。

表 15 大学がもっとボランティア活動について奨励策をとるべきか(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
思う	49.6	47.0	37.5	48.6
思わない	11.5	21.7	9.7	13.9
わからない	19.5	22.9	41.7	29.0
無回答	19.5	8.4	11.1	8.5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

「大学がもっとボランティア活動について奨励策をとるべきか」という点については、「思う」という回答が多くなっている。「思う」という回答が最も低い愛知県立芸術大学においても、「わからない」という回答が 41.7%であるように、必ずしも否定的であるわけではない。

では、具体的にどのような奨励策が求められているのだろうか。

表 16 大学がボランティア活動奨励策として求めること(複数回答)(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
学校の単位として認定	39.3	38.5	55.6	40.3
学校行事として参加	25.0	46.2	25.9	27.2
講座・セミナーの開催	42.9	23.1	14.8	26.7
相談窓口の設置	35.7	23.1	11.1	26.7
ボランティア活動情報の提供	53.6	20.5	22.2	43.2
活動を行う学生の積極的評価	33.9	33.3	22.2	20.9
活動のための資材・機材提供	25.0	20.5	22.2	18.9
活動のための資金提供	39.3	30.8	29.6	25.7
活動のための場所提供	35.7	35.9	22.2	27.2
その他	1.8	0	0	0

表 16 に示したように、どの項目も一定の回答があるが、「ボランティア活動情報の提供」と「学校の単位として認定」に関する回答の割合が高くなっており、一定のニーズがあることがわかる。大学別にみると、全体的に愛知淑徳大学の回答割合が高くなっているが、「活動を行う学生の積極的評価」と「活動のための場所提供」は、愛知淑徳大学と愛知医科大学で回答の割合が高い。

なお、大学として取り組むべきことに関する主な自由回答の内容は、以下の通りである。

<大学として取り組むべきこと>

①愛知淑徳大学

- ・資金や機材の提供・行政の支援
- ・ボランティアをしてみたいと思っている人が相談しやすいような窓口、センターを多く配置してほしい
- ・ボラまっちなごやのようなイベントをもっと開催してほしい
- ・大学合同運動会・団体同士(学生)の情報交換会
- ・ボランティア交流会・活動紹介
- ・大学のボランティアセンターで、多くのジャンルのボランティア経験を聞けるコネクションを作してほしい
- ・大学と企業で連携してほしい
- ・ボランティアに対する「ただ働き」のような間違った認識が広がらないようセミナーを開催する
- ・知り合いがいなくても参加しやすいボランティアにしてほしい
- ・ボランティアをしてみたいと思っている学生がいても CCC には入りづらいと感じている人がいると聞いたことがある。CCC はじめボランティアがもっと身近に感じれるといいなと思う
- ・他大学や企業と交流し、協力して何かやりたい

## ②愛知医科大学

- ・大学のカリキュラムとして扱うのではなく、窓口での紹介等をしてほしい
- ・ボランティアを行うネットワークが知りたい
- ・学科に応じて適したボランティア情報を集めてほしい
- ・ボランティア活動という言葉に対する距離を縮める。まずは教員にボランティアをさせる
- ・もっと大学間のつながりを作って、大人数集めることができれば、さらに大きいことができるので、そういったシステムがあればいいと思う
- ・場所の提供

## ③愛知県立芸術大学

- ・宣伝を広げること、ボランティアの内容を詳しく教えてほしい
- ・ボランティアに関する説明会や社会意義を説明する講座があればいいと思う
- ・単位として認定すればボランティアをやる人がふえるかも...
- ・着なくなったお洋服を服のない子どもにあげたいから、そういう枠組みを作ってほしい
- ・偽善的にならないようにしてほしい
- ・課外演奏

## ④愛知県立大学

- ・ボランティア活動の周知
- ・情報提供の場所を開設してほしい
- ・様々な分野の情報がほしい
- ・ボランティアを身近に感じられるとりくみ
- ・自己の成果のオープンソース、オープンデータ
- ・コミュニケーションの図りやすい場所づくり
- ・つながりをつくる
- ・資金面の援助

## 6. ボランティア参加促進に向けての課題

前節までは、ボランティア活動をしている学生の経験、および、大学への期待を中心に見てきた。その一方で課題となっているのは、ボランティア経験がない学生への働きかけである。この点について、まずはボランティア活動に参加しなかった理由から見ていこう。

表 17 ボランティア活動に参加しなかった理由(複数回答)(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
興味のあるボランティア活動がなかったから	25.0	22.2	23.3	21.0
ボランティア活動の機会がなかったから	43.8	53.7	53.3	51.9
ボランティア活動をする時間がなかったから	28.1	24.1	26.7	25.9
無償で働く気はないから	12.5	11.1	3.3	13.6
ボランティア活動は偽善的だと思うから	3.1	1.9	10.0	3.7
なんとなく行きそびれていた	28.1	31.5	13.3	24.7
その他	0	1.9	0	4.3

ボランティア活動に参加しなかった理由として圧倒的に多いのは、いずれの大学でも、「ボランティア活動の機会がなかったから」という回答である。「ボランティア活動をする時間がなかったから」、「興味のあるボランティア活動がなかったから」という回答が続く。

ボランティア活動の推進をめぐるには、上述のボランティア活動に参加できなかった原因とともに、現時点でボランティアに参加できない何らかの要因が存在する可能性についても目を向ける必要がある。この点については、サンプル数が最も多い愛知県立大学の調査データから、ボランティア参加の時間的制約条件となりそうな、「通学時間」、「アルバイト」、「部活・サークル」との関係から分析を試みたい。

表 18 現在のボランティア参加と通学時間

現在のボランティア	通学時間(分)
している	73.3
していない	73.6

F=0.002 p=0.964 n.s.

現在ボランティア参加を「している」という学生の通学時間の平均値は 73.3 分であり、「していない」学生の平均は 73.6 分である。一元配置分散分析の結果からも、通学時間とボランティア参加の影響はないと見ることができる。



表 19 現在のボランティア参加とアルバイト

	アルバイト		合計
	している	していない	
現在のボランティア			
している	40	3	43
	93.0%	7.0%	100.0%
していない	181	27	208
	87.0%	13.0%	100.0%
合計	221	30	251
	88.0%	12.0%	100.0%

$\chi^2=1.221$   $p=0.269$  n.s.

表 19 に示したように、現在のボランティア参加とアルバイトとの間に有意な関係は認められない。

表 20 現在のボランティア参加と部活・サークル

	部活・サークル		合計
	している	していない	
現在のボランティア			
している	39	4	43
	90.7%	9.3%	100.0%
していない	152	55	207
	73.4%	26.6%	100.0%
合計	191	59	250
	76.4%	23.6%	100.0%

$\chi^2=5.888$   $p=0.015$  \*

一方、部活・サークルへの参加について、ボランティア活動をしているほど参加率が高い傾向を認めることができる(表 20)。

以上の結果から推測されるのは、通学時間やアルバイトなどの物理的な時間的制約とはなっておらず、部活・サークルへの参加についても、ボランティア活動の制約条件にはなっていないという点である。

その意味では、学生の生活条件よりも、学生のニーズに対応した支援が求められると考えられる。この点について、前節で確認したボランティア支援に関する大学への期待とともに、学生のニーズに対応した取り組みをおさえておく必要があるだろう。以下では、大学生が「今後やりたいと思うこと」に関する主な内容を、「環境関係」、「福祉・医療関係」、「子ども関係」、「地域、イベント」、「その他」に分類した上で、大学ごとに示している。

<今後やりたいと思うこと>

①愛知淑徳大学

○環境関係

- ・海岸清掃・川清掃・会館清掃
- ・自然と触れ合うキャンプなどのボランティア

○防災関係

- ・災害で避難している人の手伝い
- ・震災支援と防災に関するボランティア・被災地の復興ボランティア

○福祉・医療関係

- ・介助犬のボランティア
- ・高齢者の方と関わるボランティア
- ・日常生活のサポートをできるようなもの

○子ども関係

- ・大学生と子どもの接する場を作り、人と接することの楽しさを味わいたい
- ・子どもたちとの異文化体験や交流
- ・子どもたちと一緒に何かに取り組むようなもの
- ・子ども対象で楽しいもの(キャンプボランティア)
- ・外国の子どもへの日本語教育
- ・多くの被災者の子どもや、施設にいる子どもたちに対して子どもたちの間でも交流できるようなイベントを開催する

○地域・イベント

- ・地域を活性化するイベント
- ・イベントの手伝い

○その他

- ・大人とも一緒にボランティアがしたい
- ・自分の得意分野が活かせるようなボランティア
- ・ボランティアをやりたい学生と、ボランティアを募集する団体とのコラボ
- ・音楽に関係するボランティア
- ・様々な家族の形態を知ることができるボランティア
- ・将来のために役立つことをしたい

②愛知医科大学

○環境関係

- ・自然の生態系を守るようなボランティア
- ・公園の雑草抜き

○防災関係

- ・災害時の学生ボランティア

○福祉・医療関係

- ・在宅で治療を受けている高齢者に対して、ボランティアで生活支援を行いたいと思う
- ・施設に入っている子どもにスポーツ等の指導をする

- ・予防に関するボランティア。社会のセーフティネットとしてのボランティア
- ・福祉のボランティア(身体の不自由な方とふれあうなど)
- ・入院して、外で遊べない子と遊ぶ
- ・医学的知識の生かせるボランティア

○子ども関係

- ・子どもと関わること

○地域、イベント

- ・祭りの手伝い・地域の行事のお手伝い
- ・イベントの手伝い、救護班など

○その他

- ・海外ボランティア
- ・日常生活では接点のない、社会で本当に必要とされている活動
- ・世間の人と広く関わられるボランティアがしたい
- ・自分が学んだことを活かせるボランティア

③愛知県立芸術大学

○環境関係

- ・大学をきれいにする、清掃・植林活動

○福祉・医療関係

- ・お年寄りとの関わり合い・老人ホームなどのお手伝い
- ・課外演奏、訪問演奏、老人ホームやデイサービスでプチ演奏
- ・介助犬の世話
- ・世界の恵まれない人やあしなが育英会への募金は今でもやっているのだから続けたい

○子ども関係

- ・子供たちのためになること

○地域、イベント

- ・コンサートホールのボランティア・音楽関連のボランティアがあれば

○その他

- ・感謝されるようなこと、時間を削るのだから何か欲しい
- ・どんなボランティアがあるか全然知らないのだから情報提供してもらいたい、人のためになることがよいです
- ・自分の特技を生かせる、また勉強になること
- ・普段経験ができないこと、また人手が確実に必要なことには積極的に参加したい

④愛知県立大学

○環境関係

- ・ごみ拾い・掃除・植樹
- ・作業(花を植える、米・野菜を作る、ゴミ拾い・清掃)、作業をしながら話ができるようなもの

- 防災関係
  - ・被災地支援
- 福祉・医療関係
  - ・高齢者・医療・交流・募金
  - ・アニマルセラピー
- 子ども関係
  - ・子どもと交流・学習支援・子ども食堂・保育
  - ・塾に通いたくても通えない子へ勉強を教える
- 地域・イベント
  - ・地域の人との交流・地域のイベント
  - ・外国人向けのレクリエーションの運営
- その他
  - ・学んでいる外国語を活かせること、貧しい子どもたちの手助けになるようなこと
  - ・普段できない事
  - ・学生だからできること
  - ・他大学との交流・他大学とのつながり
  - ・インターンシップ

**7. 長久手市へのかかわりと大学間交流:長久手市における大学連携に向けて**  
最後に、長久手市における大学連携へのニーズについて見ておきたい<sup>10</sup>。

表 21 長久手市への愛着(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
感じる	36.3	39.8	34.7	32.8
感じない	14.2	19.3	18.1	23.1
どちらでもない	48.7	38.6	43.1	41.7
無回答	0.9	2.4	4.2	2.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

長久手市への愛着については、愛知医科大学を除いて「どちらでもない」という回答が最も多く、「愛着を感じる」という回答は相対的に少ない。長久手市における大学連携事業の課題の1つと見ることができる。

<sup>10</sup>長久手市でも、大学連携の記録が毎年度蓄積されている(長久手市暮らし文化部たつせがある課編, 2017)。関連して、長久手市の地域政策と住民参加、ボランティア活動推進の一端は、松宮(2007, 2014, 2015)、加藤・有間・松宮(2015, 2016)で論じている。なお、長久手市の実施している市民意識調査では、「大学生をまちづくりに生かしている」という項目への重要度・推進度に対する評価は相対的に低くなっている(長久手市編, 2017:58-59)。大学連携を進める上では考慮すべき課題である。

表 22 長久手市内の他大学との交流をしたいと思いますか(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
思う	36.3	48.2	45.8	38.2
思わない	14.2	20.5	20.8	25.2
わからない	48.7	28.9	30.6	33.5
無回答	0.9	2.4	2.8	3.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

長久手市内の他大学との交流については、1/3～半数近くが「思う」と回答しており、愛知淑徳大学を除く3大学では最も多い回答となっている。ただし、「わからない」という回答も多く、交流のイメージが十分に見えていない状況とも考えられる。

表 23 どのような交流をしたいと思いますか(複数回答)(%)

	淑徳大	医大	芸大	県大
講義関連	21.1	30.0	57.6	36.4
サークル・部活動	46.5	75.0	42.4	59.9
ボランティア	60.6	25.0	21.2	25.9
その他	5.6	5.0	21.2	4.3

交流の中身については、各大学で異なっているが、「講義関連」は愛知県立芸術大学、「サークル・部活動」は愛知医科大学、「ボランティア」については愛知淑徳大学で最も高くなっている。

以上の分析は、単純集計を中心としたもので、決して十分ではないものの、以下のような現状とニーズに関する情報を得ることができたと思われる。具体的には、ボランティア参加状況は必ずしも高くないこと、ボランティアに関する情報提供のニーズが高いこと、大学でのボランティア活動の単位化についてニーズが存在すること、長久手市内の他大学との交流希望が一定程度存在することが明らかになった。これらの知見をベースにビジョンを策定するわけだが、こうした大学生の実態とニーズに関する分析を深めつつ、長久手市と地域が取り組む課題とを摺り合わせ、ビジョン策定を進めていきたい<sup>11</sup>。

## 謝辞

調査にご協力いただいた皆様に、記して感謝申し上げます。

## 付記

本稿は、長久手市大学連携基本計画策定ワーキンググループ受託研究事業による研究成果の一部である。

<sup>11</sup>長久手市大学連携基本計画は、2018年3月に完成予定である。

## <文献>

- 愛知県立大学東日本大震災復興支援委員会編, 2013, 『平成 25 年度愛知県立大学ボランティア活動報告書』.
- 愛知県立大学地域連携センター・松宮朝・井戸聡編, 2007, 『「万博」の訪れと長久手』.
- 愛知県立大学地域連携センター・松宮朝・山本かほり編, 2010, 『学生主体の地域連携の可能性』.
- 愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター編, 2017, 『2016 年度 CCC 活動報告書』.
- 荒井俊行・野嶋栄一郎, 2017, 「大学生のボランティア活動への参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響」『日本教育工学会論文誌』41(1):97-108.
- 片桐新自, 2009, 『不安定社会の中の若者たち』世界思想社.
- 加藤昭宏, 2017, 「コミュニティソーシャルワーカーによる“制度の狭間”支援の展開可能性について(上)」『人間発達学研究』8:37-49.
- 加藤昭宏・有間裕季・松宮朝, 2015, 「地域包括ケアシステムとコミュニティソーシャルワーカーの実践(上)」『人間発達学研究』6:13-26.
- 加藤昭宏・有間裕季・松宮朝, 2016, 「地域包括ケアシステムとコミュニティソーシャルワーカーの実践(下)」『人間発達学研究』7:31-49.
- 木村佐枝子, 2014, 『大学と社会貢献』創元社.
- 小島祥美, 2014, 「外国人とボランティア : 子どもの就学を支える『市民の力』」内海成治・中村安秀編『新ボランティア学のすすめ』昭和堂.
- 佐々木正道編著, 2003, 『大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴェ書房.
- 新藤こずえ・金子充・関水徹平・田中秀和・川本健太郎, 2017, 「地域における大学生の学びの意義と課題」『立正大学社会福祉研究所年報』19:89-118.
- 津止正敏・斎藤真緒・桜井政成, 2009, 『ボランティアの臨床社会学』クリエイツかもがわ.
- 長久手市くらし文化部たつせがある課編, 2016, 『リモテラス公益施設(仮称)整備基本計画』.
- 長久手市くらし文化部たつせがある課編, 2017, 『平成 28 年度大学連携事業活動報告書』.
- 長久手市編, 2017. 『長久手市民意識調査報告書』.
- 松宮朝, 2007, 「『万博』はどのように経験されたのか?」『愛知県立大学文学部論集(社会福祉学科編)』55:127-156.
- 松宮朝, 2011, 「大学における地域連携・地域貢献と社会調査をめぐるノート」『人間発達学研究』2:43-50.
- 松宮朝, 2014, 「『地域参加』の施策化をめぐって」『社会福祉研究』16:15-28.
- 松宮朝, 2015, 「結節点としての喫茶店」『愛知県立大学教育福祉学部紀要』63:75-88.
- 松宮朝, 2017, 「地方消滅論と地方都市」『愛知県立大学教育福祉学部紀要』65:49-62.
- 松宮朝・加藤歩, 2014, 「祭りが生み出す新しい愛知の文化」愛知県立大学歴史文化の会編『大学的愛知ガイド』昭和堂.